



薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業 共有すべき事例

2021年
No.11
事例1

疑義照会・処方医への情報提供

処方日数



事例

【事例の詳細】

腎性貧血の80歳代の患者に、初めてダブロック錠2mgが30日分処方された。ダブロック錠の添付文書には、投与開始後はヘモグロビン濃度が目標範囲で安定するまでは、2週間に1回程度ヘモグロビン濃度を確認することが記載されている。患者は2週間後の検査の実施について処方医から説明されていなかった。処方医に確認を行った結果、30日から14日分に処方日数に変更になり、14日後に検査を行うため受診するよう患者に指示があった。

【推定される要因】

処方医の薬剤に関する知識が不足していたと思われる。

【薬局での取り組み】

添付文書の効能又は効果、用法及び用量、重要な基本的注意などを読み込んで理解し、患者にとって適切な処方がされているかをしっかり確認する。



その他の情報

ダブロック錠1mg/2mg/4mg/6mgの添付文書 2021年9月改訂（第2版）
（一部抜粋）

4. 効能又は効果

腎性貧血

8. 重要な基本的注意

8.1 本剤投与開始後は、ヘモグロビン濃度が目標範囲で安定するまでは、2週に1回程度ヘモグロビン濃度を確認すること。



事例のポイント

●ダブロック錠1mg/2mg/4mg/6mgは腎性貧血の治療薬であり、低酸素誘導因子-βプロリン水酸化酵素（HIF-PH）を阻害する作用機序を有する薬剤である。HIF-PH阻害薬は、エベレンゾ錠20mg/50mg/100mgが2019年11月に発売されて以来、2020年8月にダブロック錠1mg/2mg/4mg/6mg、パフセオ錠150mg/300mgが発売され、その後も複数の薬剤が承認されている。

●HIF-PH阻害薬の重要な基本的注意には、投与中のヘモグロビン濃度の検査頻度、ヘモグロビン濃度の急激な上昇に対する注意、血圧のモニタリング、鉄欠乏時の鉄剤の投与などに関する記載がある。薬剤を交付する際は、患者が適切に検査を受ける予定があるか、または受けているかを確認する必要がある。さらに、検査値を把握し、投与量の妥当性や鉄剤の併用の必要性を検討することが重要である。

●HIF-PH阻害薬の用法及び用量は複雑であり、製剤によって用法及び用量、食事の影響、相互作用などに違いがある。添付文書、インタビューフォーム、適正使用ガイドなどを熟読したうえで調剤を行う必要がある。また、患者に薬剤を交付する際は、製薬企業が患者向けに作成している服薬指導箋などを用いて、起こり得る副作用や注意事項を伝えるなど丁寧な説明が求められる。

<参考>ダブロック錠による腎性貧血の治療を受けられるみなさまへ

https://medical.kyowakirin.co.jp/site/drugpdf/patient/duvroq/drq_kanjyayou.pdf

●HIF-PH阻害薬を採用する場合は、あらかじめ薬局内で研修会などを行い、薬局スタッフが薬剤に関する正しい知識を習得したうえで、HIF-PH阻害薬を含む処方箋を応需した際に確認すべき内容を整理し、共有しておくことが重要である。



公益財団法人 日本医療機能評価機構
医療事故防止事業部

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-4-17 東洋ビル
電話：03-5217-0281（直通） FAX：03-5217-0253（直通）
<http://www.yakkyoku-hiyari.jcqh.or.jp/>

※この情報の作成にあたり、作成時における正確性については万全を期しておりますが、その内容を将来にわたり保証するものではありません。※この情報は、医療従事者の裁量を制限したり、医療従事者に義務や責任を課す目的で作成されたものではありません。※この情報の作成にあたり、薬局から報告された事例の内容等について、読みやすくするため文章の一部を修正することがあります。そのため、「事例検索」で閲覧できる事例の内容等と表現が異なる場合がありますのでご注意ください。